

沈約『宋書』陶潛傳について

森野繁夫

陶潛傳は『宋書』『晉書』及び『南史』に収められており、他に梁・蕭統の「陶淵明傳」がある。このうち『宋書』陶潛傳と『晉書』陶潛傳を比べてみると、内容に大きな違いがある。すなわち『宋書』陶潛傳の字数は『晉書』のほぼ二倍もあり、また潜の作品の引用も、『晉書』は「五柳先生傳」と「歸去來辭」だけであるのに、『宋書』には更に「與子儼等疏」「命子詩」を収めている。

『宋書』陶潛傳は、前半部と後半部に分ける事ができる。「五柳先生傳」と「歸去來辭」が引用されている前半部の内容は、記述に詳略はあるが『晉書』陶潛傳とほぼ同じである。しかし潜の「與子儼等疏」「命子詩」の引かれている後半部は、潜の没年を記す結びの十餘字の他は、全て『晉書』陶潛傳に見られない内容、すなわち沈約の加えたものである。

既に『宋書』謝靈運傳、顔延之傳について、沈約の史伝記述の方法を見てきたが、沈約は謝靈運、顔延之について従来^①の記録に拠りながらも、謝、顔についての自分の見方、考え方に基づいて傳を構成し記述していた。

宋代の主要人物である陶潛についても、沈約はそれと同じような方法で記述しているに違いない。『宋書』と『晉書』で陶潛傳の内容が大きく異なるのはそのためであるう。

そのことを証するためには、先ずは『宋書』陶潛傳と『晉書』陶潛傳の内容を比較しなくてはならないが、現行の『晉書』は唐初^②の編纂による。しかしそれは東晉末、宋間に著された二十種餘りの「晉史」を踏まえてまとめられたものである。唐、劉知幾『史通』卷十二に次のようにある。

皇家貞觀中有詔、以前後史十有八家、制作雖多、未能盡善、乃勅史官、更加纂錄、採正典與雜說數十餘部、兼引偽史十六國書、爲紀十、志二十、列傳七十、載記三十、并序例目錄、合爲百三十二卷。自是言晉史者、皆棄其舊本、競從新撰者焉。

皇家、貞觀中に詔有り、前後の史十有八家、制作多しと雖も、未だ能く善を盡くさざるを以て、乃ち史

官に勅して、更に纂録を加へしめ、正典と雜説數十餘部を採り、兼ねて偽史十六國の書を引き、紀十、志二十、列傳七十、載記三十、並びに序例目錄、合せて百三十二卷と爲す。是より晉史を言ふ者、皆其の舊本を棄て、競ひて新たに撰する者に従ふ。

正史『晉書』の拠った「晉史」は、當然、沈約『宋書』以前のものであるから、沈約『宋書』と比較してもよからう。

以下、「沈約『宋書』陶潛傳と『晉書』陶潛傳の内容を比較」し、その結果を踏まえて「沈約の陶潛傳増補改訂の意図」を推測する。

一、『宋書』陶潛傳と『晉書』陶潛傳の異同。

まず、『宋書』陶潛傳を前半と後半に分けて、『晉書』との異同を見ていく。

「前半部」三段にまとめた。

【宋書 1】陶氏の家柄と、陶潛の人物紹介。

・陶潛、字元亮、大司馬侃之曾孫也。祖茂、武昌太守。

・潛少懷高尚、博學善屬文、穎脫不羈、任真自得、爲鄉鄰之所貴。

嘗著「五柳先生傳」以自況曰、

先生不知何許人、不詳姓字。宅邊有五柳樹、因以爲

號焉。閑靜少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解、每有會意、欣然忘食。性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如此、或置酒招之。造飲輒盡、期在必醉。既醉而退、曾不吝情去留。環堵蕭然、不蔽風日。短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。嘗著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

其自序如此、時人謂之實錄。

（『晉書』 1）

・陶潛、字淵明。或云、淵明、字元亮。尋陽柴桑人也。曾祖侃、晉大司馬。

潛少有高趣、嘗著「五柳先生傳」以自況曰、

（『五柳先生傳』略）

其自序如此。時人謂之實錄。

*『宋書』では、家系と淵明の紹介が少し詳しくなっている。『晉書』の「五柳先生傳」は省略した。

【宋書 2】起家から柴桑歸隱までのこと。

・親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸。州召主簿、不就。躬耕自資、遂抱羸疾。復爲鎮軍、建威參軍。

・謂親朋曰「聊欲弦歌、以爲三逕之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。

・公田悉令吏種秫稻、妻子固請種秬。乃使二頃五十畝種秬、五十畝種秬。

郡遣督郵至。縣吏白應束帶見之、潛嘆曰「我不能爲五斗米折腰向鄉里小人。」即日解印綬去職。賦「歸去來」、其詞曰、

歸去來兮、園田荒蕪、胡不歸。既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫、知來者之可追。實迷塗其未遠、覺今是而昨非。舟超遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之希微。

乃瞻衡宇、載欣載奔。僮僕歡迎、稚子候門。三徑就荒、松菊猶存。攜幼入室、有酒停尊。引壺觴而自酌、盼庭柯以怡顏。倚南窗而寄傲、審容膝之易安。」

園日涉而成趣、門雖設而常關。策扶老以流憩、時矯首而遐觀。雲無心以出岫、鳥勸飛而知還。景翳翳其將入、撫孤松以盤桓」

歸去來兮、請息交而絕遊。世與我以相遺、復駕言兮焉求。說親戚之情話、樂琴書以消憂。

農人告余以上春、將有事于西疇。或命巾車、或棹扁舟。既窈窕以窮壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善萬物之得時、感吾生之行休。

已矣乎、寓形宇內復幾時。奚不委心任去留、胡爲遑遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑。

〔晉書〕2)

以親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸。州

召主簿、不就、躬耕自資、遂抱羸疾。復爲鎮軍、建威參軍。

謂親朋曰「聊欲絃歌、以爲三徑之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。

在縣公田悉令種秫穀、曰「令吾常醉於酒足矣。」妻子固請種秬、乃使一頃五十畝種秫、五十畝種秬。

素簡貴、不私事上官。郡遣督郵至縣。吏白應束帶見之、潛歎曰「吾不能爲五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪」義熙二年、解印去縣、乃賦「歸去來」。其辭曰、(「歸去來辭」略)

* 語句の異同が少しあるだけで、大きな違いは無い。

『晉書』の「歸去來辭」は省略した。

【宋書 3】柴桑歸隱以後のこと。

義熙末、徵著作佐郎、不就。

江州刺史王弘欲識之、不能致也。潛嘗往廬山。弘令潛故人龐通之齎酒具於半道栗里要之。潛有脚疾、使一門生二兒輩籃輿。既至、欣然便共飲酌。俄頃弘至、亦無忤也。

○先是、顏延之爲劉柳後軍功曹、在尋陽、與潛情款。後爲始安郡、經過、日日造潛、每往必酣飲致醉。臨去、留二萬錢與潛、潛悉送酒家、稍就取酒。

○嘗九月九日無酒、出宅邊菊叢中坐久。值弘送酒至、即便就酌、醉而後歸。

潛不解音聲、而畜素琴一張、無絃。每有酒適、輒撫弄

以寄其意。

○貴賤造之者、有酒輒設。潛若先醉、便語客「我醉欲眠、卿可去。」其真率如此。

○郡將侯潛、值其酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢還復著之。

〔『晉書』3〕

・頃之、徵著作郎、不就。

○既絕州郡謁、其鄉親張野及周旋人羊松齡寵遵等、或有酒要之、或要之共至酒坐。雖不識主人、亦欣然無忤、酣醉便反。未嘗有所造詣、所之唯至田舍及廬山游觀而已。

・刺史王弘以元熙中臨州、甚欽遲之、後自造焉。潛稱疾不見、既而語人云「我性不狎世、因疾守閑、幸非潔志慕聲、豈敢以王公紆軫爲榮邪。夫謬以不賢、此劉公幹所以招謗君子、其罪不細也。」

弘每令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐通之等齎酒、先於半道要之。潛既遇酒、便引酌野亭、欣然忘進。

弘乃出與相見、遂歡宴窮日。

潛無履、弘顧左右爲之造履。左右請履度、潛便於坐申脚令度焉。弘要之還州、問其所乘、答云「素有脚疾、向乘籃輿、亦足自反。」乃令一門生二兒共輦之至州、而言笑賞適、不覺其有羨於華軒也。

弘後欲見、輒於林澤間候之。至於酒米乏絕、亦時相贍。

○其親朋好事、或載酒肴而往、潛亦無所辭焉。每一醉、則大適融然。

○又不營生業、家務悉委之兒僕。

○未嘗有喜愠之色、惟遇酒則飲、時或無酒、亦雅詠不輟。嘗言夏月虛閑、高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人。

・性不解音、而畜素琴一張、絃徽不具。每朋酒之會、則撫而和之、曰「但識琴中趣、何勞絃上聲。」

*『宋書』では、江州刺史王弘との関わりは、記述が簡単になっている。また淵明についての逸事は、共通しているのは「畜素琴一張」だけで、他の○印の四條は『宋書』『晉書』それぞれ別の内容になっている。

・顔延之との交遊について記す。

*『晉書』では、江州刺史王弘との関わりを詳説。

また、「又不營生業、家務悉委之兒僕」の句が有る。

〔後半部〕『晉書』『宋書』では結びの一文が重なっているだけで、その他は『晉書』には無い。内容は四段（4、5、6、7）にまとめた。

【宋書 4】

潛弱年薄宦、不潔去就之迹。自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代。自高祖王業漸隆、不復肯仕。所著文章、皆題其年月、義熙以前、則書晉氏年號、自永初以來、唯云甲子而已。

【宋書 5】

與子書以言其志、并為訓戒曰、（「與子儼等疏」）

①天地賦命、有往必終。自古賢聖、誰能獨免。子夏言曰、死生有命、富貴在天。四友之人、親受音旨。發斯談者、豈非窮達不可妄求、壽夭永無外請故邪。

②吾年過五十、而窮苦荼毒。以家貧弊、東西遊走。性剛才拙、與物多忤。自量為己、必貽俗患。僂俛辭世、使汝幼而飢寒耳。

③常感孺仲賢妻之言、敗絮自擁、何慚兒子。此既一事矣、但恨隣靡二仲、室無萊婦。抱茲苦心、良獨罔罔。

④少年來好書、偶愛閑靜。開卷有得、便欣然忘食。見樹木交蔭、時鳥變聲、亦復歡爾有喜。嘗言五六月北窗下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。

⑤意淺識陋、日月遂往。緬求在昔、眇然如何。疾患以來、漸就衰損。親舊不遺、每以藥石見救、自恐大分將有限也。

⑥恨汝輩稚小、家貧無役、柴水之勞、何時可免。念之在心、若何可言。

⑦然雖不同生、當思四海皆弟兄之義、鮑叔敬仲、分財無猜。歸生伍舉、班荆道舊、遂能以敗為成、因喪立功。他人尚爾、況共父之人哉。

⑧潁川韓元長、漢末名士。身處卿佐、八十而終。兄弟同居、至于沒齒。濟北氾稚春、晉時操行人也。七世同財、家人無怨色。

⑨詩云、高山仰止、景行行止。汝其慎哉、吾復何言。

【宋書 6】

又為「命子詩」以貽之曰、

- ①悠悠我祖、爰自陶唐。邈為虞賓、歷世垂光。御龍勤夏、豸韋翼商。穆穆司徒、厥族以昌。
- ②紛紜戰國、漠漠衰周。鳳隱于林、幽人在丘。逸虬撓雲、奔鯨駭流。天集有漢、眷予愍侯。
- ③於赫愍侯、運當攀龍。撫劍夙邁、顯茲武功。書誓山河、啟土開封。璽璽丞相、允迪前蹤。
- ④渾渾長源、蔚蔚洪柯。羣川載導、衆條載羅。時有默語、運固隆汙。在我中晉、業融長沙。
- ⑤桓桓長沙、伊勳伊德。天子疇我、專征南國。功遂辭歸、臨寵不惑。孰謂斯心、而可近得。
- ⑥肅矣我祖、慎終如始。直方二臺、惠和千里。於皇仁考、淡焉虛止。寄迹夙運、冥茲愠喜。
- ⑦嗟余寡陋、瞻望靡及。顧慚華鬢、負景隻立。三千之罪、無後其急。我誠念哉、呱聞爾泣。
- ⑧卜云嘉日、占爾良時。名爾曰儼、字爾求思。溫恭朝夕、念茲在茲。尚想孔伋、庶其企而。
- ⑨厲夜生子、遽而求火。凡百有心、奚待于我。既見其生、實欲其可。人亦有言、斯情無假。
- ⑩日居月諸、漸免于孩。福不虛至、禍亦易來。夙興夜寐、願爾斯才。爾之不才、亦已焉哉。

【宋書 7】

潛元嘉四年卒。時年六十三。

『晉書』7)

以宋元嘉中卒、時年六十三、所有文集並行於世。

*『宋書』では、卒年が明示されている。

*『晉書』その文集が世に読まれたことが記されている。

以上、『宋書』『晉書』の陶潛傳について内容の異同を見てきたが、『宋書』の前半部は『晉書』の内容と殆ど同じであり、後半部は「7」の他は『晉書』には無く、沈約の増補によるものであった。

次に異同の箇所を比較して、そこに込められた沈約の考えを推測することにする。

二、増補改訂の意図

沈約は何故このように、前半部は『晉書』潛傳の全てをほぼそのまま踏襲し、後半部を潛の「與子儼等疏」と「命子詩」によって構成したのか。おそらくそれは『晉書』に描かれた陶潛像とは異なる、自分なりの見方、考え方を示すためであろう。以下、沈約の意図を推測する。

1 「前半部」について

『晉書』とほぼ同じ内容であるが、異同も何箇所か見られる。

①江州刺史王弘との関わりについて

『宋書』では、かなり簡略になっている。逸事、逸話の多用は『晉書』の特色であるが、沈約はその点にあまり興味が無かった、というよりは、淵明傳撰作のねらいが異なっていたためではなからうか。

②顔延之との交りが記されていることについて

淵明と顔延之の交りについては、延之「陶徵士誄」(『文選』卷五七)の内容から、それがどのような情況であったのかよくわかる。そこには義熙十一年(四一五。三十歳)延之が江州刺史劉柳の後軍功曹として尋陽に勤務していた時期の記事があるが、二人はそれ以前からの知り合いらしい。延之の「陶徵士誄」に「あなたが世俗と絶つてより、私の暇も多くなつた」とあるので、淵明が郷里の柴桑に歸つた頃からの交わりであつたようだ。

延之が尋陽に勤務していたころ、淵明も尋陽に住んでおり、年齢は淵明が五十一歳、延之が三十歳の「忘年の交り」であつた。延之「徵士誄」の結びには、その頃の二人の会話が次のように記されている。

自爾介居、及我多暇、伊好之洽、接閭隣舍。

宵盤晝憩、非舟非駕。「念昔宴私、舉觴相誨。

獨正者危、至方則礙。哲人卷舒、布在前載。

取鑒不遠、吾規子佩。」

爾實愀然、中言而發。違衆速尤、迂風先蹙。

身才非實、榮聲有歇。叡音永矣、誰箴余闕。

嗚呼哀哉。

爾の介居してより、我の暇多きに及ぶ。伊れ好みは、冷く、閭を接し舎を隣にす。宵は盤み晝は憩ひ、舟に非ず駕に非ず。念ふ昔宴私せしとき、觴を擧げて相誨ふ。『獨り正しき者は危く、至方のものは則ち礙る。哲人の巻と舒は、布きて前載に在り。鑒を取ることを遠からず、吾が規を子佩びよ』と。

爾實に愀然たり、中言にして發す。『衆に違へば尤を速き、風に迂へば先づ蹙る。身才は實に非ず、榮聲は歇む有り』と。叡音永きかな、誰か余が闕を箴めん。嗚呼哀しいかな。

「あなたが世俗と絶つてより、私の暇も多くなった。しばしば往き來して、村が近く家が隣という状態だった。夜は楽しく飲み交し昼は休息し、舟も駕もいらなかった。その昔、宴を開いて楽しんだ時、盃を挙げて戒めあったものだ。私は『我が身だけが正しいとする者は危険であり、真四角の者は塞がつて動きがとれなくなってしまう。哲人の出處進退については、昔の書物に記されている。手本とすべきことは近くに在る。私の戒めを、どうかお忘れなきように』と言った。

するとあなたは、明らかに動揺して、私の言葉なかばにして言った『衆に違えば咎めを招き、世の習慣に逆らうと誰よりも先に倒れる。身体と才能は中身のある確かな

ものではないし、榮譽と名聲も無くなってしまふものだ』と。今は言葉も遠くなつてしまった。誰が私の過ちを戒めてくれるのか。ああ、哀しいことだ。」

延之は翌（義熙十二年）年に豫章公劉義符の中軍行參軍になつていたので、尋陽におけるこのような状態は一年ほど続いたのであろう。

その数年後、延之は時の権力者徐羨之、傅亮らに憎まれて始安郡に左遷された。その赴任途中に柴桑に立ち寄つた時の様子が『宋書』潜傳に記されている。

兩者の出会いの記録はこれだけであるが、この後も二人の関わりは潜の亡くなるまで続いていたに違いない。会えないまでも氣心の知れた者同士、書信や作品のやりとりはなされていたであらう。

沈約が淵明と延之の関わりを傳の前半に入れたのは、この頃、二人が時勢についての不満を述べ合つていたであらうことを言いたかつた。延之は時の政權担当者徐羨之、傅亮らの遣り方に不満を懷く「褊激の性」の人。一方淵明は郷里に歸つて既に十年、時代が晉から宋へ移行しつつあることへの憤懣もたまつていたに違いない。それは「五柳先生傳」や「歸去來辭」に記されているような脱俗の境地と無縁のものであつた。

2 後半部について

『宋書』4、5、6は『晉書』には無いので、兩者の比較はできない。ここでは沈約の増補改訂の意図を推測す

るまえに、後半部の内容を見ておく。

【宋書 4】

潜は弱年にして薄宦、去就の迹を潔くせず。自ら曾祖は晉の世の宰輔なるを以て、復た身を後代に屈するを恥づ。

高祖の王業漸く隆んなる自り、復た仕ふるを肯ぜず。著す所の文章は、皆な其の年月を題するも、義熙以前は、則ち晉氏の年號を書し、永初より以來は唯だ甲子を云ふのみ。

潜は若い頃低い官職に就いたが、そこに腰を落ち着けることができず、進退をはつきりとはさせなかった。すなわち、

- ・ 以親老家貧、起爲州祭酒。不堪吏職、少日解歸。
- ・ 州召主簿、不就。
- ・ 復爲鎮軍參軍、建威參軍。
- ・ 謂親朋曰、聊欲絃歌、以爲三徑之費、可乎。執事者聞之、以爲彭澤令。「吾不能爲五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪」解印去縣。

自分では、曾祖父陶侃が晉の世の宰輔であつたことで、復た身を後の代に屈することを恥ぢたのであつた。

なお『晉書』陶侃傳によれば、

侃有子十七人、唯洪、瞻、夏、琦、旗、斌、稱、範、岱見舊史。餘者並不顯。

とあり、このうち『晉書』には、瞻は「歷廬江、建昌二郡太守、遷散騎常侍、都亭侯」、稱は「東中郎將、南平太守、南蠻校尉、假節」、範は「最知名、爲光祿勳」と記す。なお潜の祖父の茂は『宋書』潜傳に「武昌太守」とあるが、「餘者並びに顯れず」の中の一人であつたようだ。高祖（劉裕）の王業が次第に隆んくなってからは、潜はもはや仕えようとはしなかった。著した文章には、皆な其の年月を記し、義熙以前は則ち晉氏の年號を書いていたが、永初（宋初の年號）より後は唯だ甲子を記すだけであつたという。

【宋書 5】——「與子儼等疏」

この作品は、②に「吾は年五十を過ぐるも、而も窮苦荼毒。家の貧弊なるを以て、東西に遊走す」とあるので、五十歳以後に作られたものである。

淵明は子たちに書を與えて自分の志を述べ、あわせて訓戒して言う。

①天地命を賦す、往く有れば必ず終る。古へ自り賢聖も、誰か能く獨り免れん。子夏言ひて曰く「死生命有り、富貴天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を發する者、豈に窮達妄りに求む可からず、壽夭永く外請無きが故に非ず邪。

生命は天地が與えたもので、生あれば必ず終る。古

より賢聖も、死を免れた者は獨りもない。子夏は言った、「死生 命有り、富貴 天に在り」と。孔子の「四友」たちは、親しくその教えを受けた。斯の談を發するのは、窮達は妄りに求めることはできず、壽夭はどこまでも人頼みができないからではないか。

② 吾年五十を過ぐるも、而も窮苦 荼毒。家の貧弊なるを以て、東西に遊走す。性は剛才は拙なれば、物と忤ふこと多し。自ら量るに己の爲に、必ず俗患を貽さんと。僂俛 世を辭し、汝ら幼をして飢寒ならしむる耳。

私は五十歳を過ぎて、これまで窮苦にして荼毒。家が貧弊なるゆえに、東へ西へと遊走した。性格が剛情で要領が悪く、人とぶつかることが多かった。思うに己の爲に必ず皆に迷惑を及ぼすに違いないと。かくて勉めて世間と関わりを持たないようにしたので、お前たち幼い者たちを飢え凍えさせてしまった。

③ 常て孺仲が賢妻の言に感ず、敗絮 自ら擁す、何ぞ兒子に慚ぢんと。此れ既に一事なり、但だ恨む隣に二仲靡く、室に萊婦無きを。茲の苦心を抱き、良に獨り罔罔たり。

嘗て王霸の賢妻の言葉に感じたことがある。「敗絮は自分の意志で着ているのだから、どうして兒子に慚ぢることがあるか」と。これが隠棲の理由の一つであった。但だ隣に二仲が居らず、家には老萊子の婦もいなかったのが残念だ。この苦しい心を抱きつつ、良に獨り辛い

思いをしている。

④ 少年來り書を好み、偶ま閑靜を愛す。卷を開きて得る有れば、便ち欣然として食を忘る。樹木 蔭を交へ、時鳥 聲を變ずるを見るや、亦た復た歡爾として喜ぶ有り。嘗て言ふ、五六月 北窗の下に臥し、涼風の暫く至るに遇へば、自ら謂へらく是れ羲皇上の人なりと。

少年の頃から読書を好み、偶ま閑靜を愛していた。卷を開いて心に得るもの有れば、便ち欣然として食を忘れたし、樹木が蔭を交えるようになり、時鳥の聲が變つてくれば、復た歡爾として喜んだものだ。嘗て言つたことがある、「五六月の頃 北の窗の下に臥し、涼風が暫く吹いてくると、羲皇の時の人の氣分になる」

⑤ 意は淺く識は陋く、日月遂に往く。緬かに在昔を求むるも、眇然如何んせん。疾患以來、漸く衰損に就く。親舊 遺れず、毎に藥石を以て救はるも、自ら大分の將に限り有らんとするを恐る。

思慮は淺く見識は陋いまま、月日は遂に過ぎ往く。緬かに昔を求めても、眇然として どうにもならない。疾患にかかつて以來、次第に身体は衰損えてゆく。親戚舊知は遺れずに、毎に藥石を以て救ってくれるが、自分では壽命が盡きんとしているのではと恐れている。

⑥ 恨むらくは汝輩の稚小にして、家は貧にして役無く、柴水の勞、何れの時か免る可き。之を念ひて心に在り、若何ぞ言ふ可き。

恨むらくは お前たちが稚小く、家は貧しく人手は無く、家事手伝いの苦勞が無くなるのは何時のことか。このことが常に心に在り 言う言葉も無い。

⑦ 然れども同生ならずと雖も、當に四海 皆な弟兄の義を思ふべし。鮑叔敬仲は、財を分かちて猜ひ無し。

歸生 伍舉、荊を班きて舊を道ひ、遂に能く敗を以て成と爲し、喪に因りて功を立つ。他人すら尚ほ爾り、況や父を共にするの人なるをや。

しかしながら同生ではないといつても、「四海は皆な兄弟」という言葉の意味を思うように。鮑叔と敬仲は、財を分け合つて猜うことは無かつたし、歸生と伍舉は、雜草を敷いて昔のことを話し合つた。かくて管仲は失敗を成功に換え、喪失に因つて功を立てた。他人同士でさえ此のようなのだ。まして父親を共にするものであれば尚更のこと。

⑧ 潁川の韓元長は、漢末の名士なり。身は卿佐に處り、八十にして終る。兄弟同居し、齒を没するに至る。

濟北の汜稚春は、晉時 操行の人なり。七世 財を同じくし、家人に怨む色無し。

潁川の韓元長は、漢末の名士。その身は卿佐であつて、八十歳で亡くなつたが、兄弟が同居して、死ぬまで一緒にいた。濟北の汜稚春は、晉時の操行正しい人であり、七世にわたつて財産を共有したが、家人は怨む色も見せなかつた。

⑨ 詩に云ふ「高山は仰止ぎ、景行は行止く」と。汝其

れ慎まんな、吾復た何をか言はん。

詩に云ふ「高山は仰がれ、景行は模範とされる」と。お前たちくれぐれも身を慎んでそのような存在になるように。私としてはこれだけを言っておきたい。

【宋書 6】—「命子詩」

この作品は、長男の儼が生まれた時のものであるから、淵明三十歳前後の作であろうか。

① 悠悠たり 我が祖、爰に陶唐に自る。

邈かに虞の賓と爲り、歷世 光を垂る。

御龍は夏に勤め、豕韋は商を翼く。

穆穆たる司徒、厥の族より以て昌えたり。

悠悠なり 我が祖先は、陶唐の世から始まつた。

邈かに虞舜の客分となり、歷世 光を垂れた。

御龍は夏に勤め、豕韋は商を翼けた。

穆穆たる司徒陶叔の時から、厥の陶氏は昌えたのだ。

② 紛紜たる戦國、漠漠たる衰周。

鳳は林に隠れ、幽人は丘に在り。

逸虬は雲を撓こし、奔鯨は流れを駭かす。

天は有漢に集ひて、予が愍侯を眷りみる。

紛紜と亂れた戦國の世、漠漠と衰えし周王朝。

鳳凰は林に隠れ、幽人は丘に在つた。

逸虬は雲を撓こし、奔鯨は流れを駭かした。

天命は漢に集ひ、我が愍侯陶舍が恩寵を受けた。

③ 於 赫ける愍侯、運は攀龍に當る。

劍を撫して夙に邁き、茲の武功を顯す。
書して山河に誓ひ、土を開封に啟く。

③ 聶聶たる丞相は、允に前の蹤を辿む。
赫かしき愍侯、運は攀龍に當つていた。

劍を撫して早くから出陣し、あの武功を顯した。

漢王は山河に誓つて、新たに領地を與えられた。

聶聶として勤めた丞相陶青、誠に先祖の蹤を歩んだ。

④ 渾渾たる長き源、蔚蔚たる洪き柯。

羣川は載ち導かれ、衆條は載ち羅なる。

時に默と語と有り、運は固より隆になると汗ると。

我が中晉に在りて、業は長沙に融く。

渾渾として流れる長き源、蔚蔚と茂る洪きな柯。

羣川はそこから導かれ、衆の條はそこから分れた。

時によつて進退はさまさま、運には盛衰が有つた。

我が東晉の世に在りて、功業を長沙公が融かせた。

⑤ 桓桓たる長沙、伊れ勳あり伊れ徳あり。

天子 我に疇ひて、専ら南國を征たしむ。

功遂げて辭し歸り、寵に臨むも惑はず。

孰か謂ふ斯の心、而して近ごろにして得可しと。

桓桓と威風ある長沙公、勳功はあり徳もあつた。

天子は指名されて、専ら南國を征たしめられた。

功遂げて辭し歸り、恩寵に臨むも惑いはなかつた。

孰か謂はん斯の心、近ごろにして得可きものと。

⑥ 肅めるかな我が祖、終りを慎むこと始めの如し。
直きこと一臺に方び、恵みは千里を和ぐ。

於皇いなり仁なる考、淡焉くして虚止しく。
迹を夙運に寄せて、茲の愠喜を冥くす。

肅める哉 我が祖父、終りを慎むことは始めの如く。
直きこと先祖の二人に方び、恵みは千里を和げた。

於皇いなり仁なる父、淡泊にして虚心。

行動を夙運に寄せて、喜怒哀樂を冥くする。

⑦ 嗟余は寡陋にして、瞻望すれども及ばず。

顧りみて華鬢を慚ぢ、景を負ひて隻り立つ。

三千の罪、後の無きを其れ急とす。

我 誠に念ふ哉、呱として爾の泣くを聞く。

嗟 私は寡陋であつて、瞻望んでも及ばぬこと。

顧りみて華鬢を慚ぢ、影を負つて隻り立つている。

三千の罪のうち、後の無いことが最も重い。

私は誠にそれを念いつつ、呱として爾の泣声を聞いた。

⑧ トして云に嘉き日、占ひて爾れ良き時。

爾に名けて儼と曰ひ、爾に字して求思といふ。

朝夕に溫恭なれ、茲を念ふこと茲に在てせよ。

尚ほ想ふ孔伋に、庶はくは其れ企ばんことを。

トえばそれは嘉き日、占えばこれは良き時。

爾に名けて儼と曰ひ、爾に字して求思といふ。

朝夕に溫恭であれ、茲を念えば茲に在てす。

尚ほ想ふ孔伋に、庶はくは其れ企ばんことを。

⑨ 厲夜に子を生めば、遽かに火を求む。

凡百 心有り、奚ぞ我を待たんや。

既に其の生まれたるを見、實に其の可ならんことを欲

す。

人も亦た言有り、斯の情 假無しと。

厲の人が夜に子を生めば、遽かに火を求めるとか。

全ての親にその心、どうして私だけであろうか。

既に其の生まれたるを見て、實に立派に育てと思う。

人も亦た言っている、子を思う情に 假無しと。

⑩ 日や月や、漸く孩より免れん。

福は虚しくは至らず、禍は亦た來たり易し。

夙に興き夜に寐ねよ、願くは爾斯れ才あらんことを。

爾にして之れ不才ならんか、亦た已んぬる哉。

日がすぎ月が過ぎて、次第に孩から免れてくる。

福は虚しくは至らないし、禍は亦た來たり易い。

朝早く興き夜も励め、願くは爾に才あらんことを。

爾がもし不才であれば、それも亦た仕方のないこと。

以上が『宋書』4、5、6の内容であるが、そこには淵明についての沈約のどのような見方が込められているのであろうか。

＊『宋書』4について―傳の前半と後半との関わり

上述のように『宋書』本傳に描かれた淵明像は、前半と後半では大きく異なっている。沈約は前半と後半をどのように繋いでいるのであろうか。後半の初めにある『宋書』4の文が、その繋ぎの文になっているようだ。

沈約は、『晉書』淵明傳の内容を、ほとんどそのまま

前半に使って當時の淵明像を示し、それを踏まえたうえで後半において先ず自分の淵明解釈を、

潛弱年薄宦、不潔去就之迹。自以曾祖晉世宰輔、恥

復屈身後代。

自高祖王業漸隆、不復肯仕。所著文章、皆題其年月、

義熙以前、則書晉氏年號、自永初以來、唯云甲子而

已。

と提示し、そのあと、淵明の二作品を挙げることによつて、自分の考えを述べるつもりであったようだ。

沈約は、淵明が「薄宦」に就いてはすぐに止めて「去就の迹を潔くしなかった」理由を、その性格が「たくらみ多き官界」に適応できなかったことだけでなく、曾祖陶侃は晉世の宰輔であつたのに、自分は「身を後代に屈」することを恥じたためと見ている。

そのような淵明が「五柳先生」のような生活を本氣で考えているはずがない。それを「時人」は「實録」としたというがそれは違う、というのが沈約の思いであつたろう。彭澤令を「我不能爲五斗米折腰、向鄉里小人。」と言って「即日、印綬を解きて職を去」つたのも、以上のような先祖の誇りが背景に在つたためと、沈約は見えていたようだ。

＊『宋書』5（「與子儼等疏」）―収録の意図

「與子儼等疏」の内容をまとめると、

・自分が榮達を、強いて求めようとしなかった理由。

生命は天地が與えたもので、生あれば必ず終る。古より賢聖も、死を免れた者は獨りもない。それと同様に榮達は妄りに求めて得られるものではない。

・自分が官を辭して隱棲した理由。

性格が剛情で、要領が悪く、人とぶつかることが多かった。思うにこのままでは其の爲に、家族など皆に必ず迷惑を及ぼすに違いないと。かくて勉めて世間と関わりを持たないようにした。そのため五十歳を過ぎても、これまで窮苦にして荼毒。家が貧弊なるゆえに、東へ西へと遊走して、お前たち幼い者を飢え凍えさせてしまった。

・自分の性格について

少年の頃から読書を好み、閑靜を愛していた。卷を開いて心に得るもの有れば、便ち欣然として食を忘れたし、樹木が蔭を交えるようになり、時鳥の聲が變つてくれば、復た歡雨として喜んだものだ。

・先の見えてきた自分のこと。

思慮は浅く見識は陋いまま、月日はかくて過ぎて往く。緬かに昔を求めても、眇然としてどうにもならない。疾患にかかつて以來、次第に身体は衰損えてゆく。自分では、壽命が盡きんとしているのではと恐れている。

・苦勞させてきた子供たちに謝る。

恨むらくは お前たちが稚小く、家は貧しく人手は無く、家事手伝いの苦勞が無くなるのは何時のことか。このことが常に心に在り、言う言葉も無い。

・兄弟仲良くするように。

これまでお前たちに苦勞させて申し訳ないことだが、同じ父から生まれた兄弟だから、どうか仲良くしてほしい。

・子供を戒めて、将来に期待を寄せる。

詩に云ふ「高き山は仰がれ、景き行いは模範とされる」と。お前たちくれぐれも身を慎んで名家なる陶氏を嗣ぎ、「高山」と仰がれ、「景行」を模範とされるように。私としてはこれだけを言っておきたい。

これは、淵明がそれまでの自分の生涯を振り返つての思である。すなわち、「榮達は、求めて得られるものではない。そのため私は性に合わない無理なことはしなかった。官を辭して隱棲したのは、性格が剛情で、要領が悪く、人とぶつかることが多く、皆に迷惑をかける懼れがあるためであつた。その結果、家族を貧乏なめにあわせて誠に申し訳ない次第だ。それは自然の中の自由な暮らしを願う、自分の性格にもよるものであつたが、私の生涯も、この程度のもので終わりそうだ。お前たち兄弟仲良くして、人々に模範とされるような人になるように努力してほしい」と。

傳の前半に挙げられた「歸去來辭」には、歸田の際の、自然の中で生活ができる喜びが詠われているが、この「與子儼等疏」によれば、その後の家族の暮らしはかなり苦しいものであつたようだ。沈約が此の「疏」を引いたのは、歸田してからの淵明一家の生活が「歸去來辭」に詠われ

ているような穏やかなものではなかったことを示すためでもあったろう。

*『宋書』6（「命子詩」）―収録の意図

「命子詩」の内容をまとめると、

堯舜に仕えて以来、戦国、漢と家を伝え、東晉の宰相曾祖父陶侃に至る誇るに足る先祖の経歴を、全十章のうち前半六章を費やして詠っている。

後半四章は、親として情けない存在である自分のことと、このたび生まれた子への期待を述べる。―このたび世継ぎの子が生まれたことで、私のせめてもの務めが果たせた。どうか無事に育ってほしい。朝早く起き、夜も励めよ。願わくは才の有らんことを。もし不才であれば、それも亦た仕方ないことだと。

詩の前半六章は、「宋書」4の「自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代」の証明であり、淵明が高位について業績をあげ、先祖の名に恥ぢない存在になることを願っていたことを示している。その願いを叶えるためには「薄官」に就いていたのではどうにもならない。淵明はその為に「去就を潔くしなかった」のであり、ただに官界に馴染めぬ性格的な理由によるものではなかった。また当然のことながら初めから隱棲を希望していたわけでもない。後半の四章は、生まれた子が、朝に晩に学問に励んで「温恭」なる人物になってほしい、「強情」で頑な、人とぶつかることが多い私のような人間にならないように、との願いであった。

に、との願いであった。

要するに沈約は、淵明の「與子儼等疏」「命名詩」を挙げて、古代から連綿と続くその家系を強調し、自分は良き継承者ではなかったが、お前たちは家名を辱めないように精進を重ねてほしいという、父親としての淵明の願いを紹介している。

三、まとめ

『宋書』陶潛傳を以上述べたような形にまとめた沈約の意図はどこにあったのか。「五柳先生傳」については、「時人は之を實録と謂」ったとあるように、「脱俗」「清貧」の淵明像形成の重要な資料であり、また官界に決別し自然の中で自由に生きることを詠じた「歸去來辭」は、これも淵明像形成に効果のあった作品であるため、沈約はそれらを挙げることによって、淵明についての当時の人々の見方を示している。

沈約としては、淵明が此の二つの作品を書いた背景を次のように考えていたようだ。すなわち、淵明は先祖の、具体的には東晉の宰相となった曾祖父陶侃のような存在でありたいと願っていたが、思うような官に恵まれず、また持ち前の「強情」で要領が悪く、人とぶつかることの多い自分の性格が、家族ら周辺の皆に災いを及ぼすことを懼れて、仕官を諦めた。また時代は、陶侃の仕えていた晉王朝が劉裕に篡奪されようとしていたこともあ

り、出仕の氣持ちを棄ててしまった。かくて「五柳先生傳」「歸去來辭」は作られたと。

このように見てくると、それらは隱棲を願つての作ではなく、諸々の事情で官途を諦めざるを得なくなったことによる作品であつた。

淵明の隱棲を以上のように考えていた沈約は、その傳をまとめるにあたつて、前半と後半の二部に分け、「晉史」に記されていた内容を、ほぼそのまま前半に置き、「五柳先生傳」と「歸去來辭」によつて當時の淵明像を示し、それを踏まえたうえで後半において先ず自分の淵明解釈を提示（『宋書』4）し、そのあと潜の二作品「與子儼等疏」「命名詩」を挙げて、輝かしい先祖を持つ誇りと、その名を汚すことのないようにとの、子どもたちへの願いと戒めにしたのであろう。

既に沈約『宋書』謝靈運傳、同じく顔延之傳で見えてきたように、沈約は自分の考えている謝靈運、顔延之像に基づいて其の傳を記しており、従來の考え方には従つていなかったようだ。潜の傳においてもその立場に変わりはなく、かくてそれまでの陶淵明傳とは異なる傳が書かれたのであろう。

注

①「沈約『宋書』顔延之傳について」（『中国中世文学研究』55）

「沈約『宋書』謝靈運傳について」（『中国中世文学研究』

56）

②『晉書』陶潜傳に関する逸文は、『晉書輯本』などによれば次の四條しか見られないので、比較の資料とするには少なすぎる。

臧榮緒『晉書』

・陶潜為彭澤令。在縣、公田悉令種秫穀。曰「令吾常醉于酒足矣」

（『書鈔』卷七八、縣令）

・潜解印後、有脚疾。使一門生二兒舉籃輿、詣王弘。既至欣然、

與之飲酒。（『書鈔』卷一四〇、輿）

何法盛『晉中興書』

・陶潜為彭澤令。督郵察縣。縣吏入白「當板履而就詣」潜曰「吾

不能為五斗米、折腰向鄉里小豎。」于是挂冠而去。（『書鈔』卷

七八、縣令）

・顔延之為始安郡。道經尋陽、常飲淵明舍、自晨達昏。及淵明

卒、延之為誄、極其思致。（『文選』顔延年「陶徵士誄」李善

注）

③『宋書』陶潜傳後半部の語釈

「義熙」東晉末の年号。四〇五～四一八。

「永初」宋初の年号。四二〇～四二二。

「并爲訓戒曰」「本集」には「子の儼らに與ふる疏」として収められている。

（「與子儼等疏」）

「天地賦命」この句の前に、本集には「告儼俟份俟修」（儼、俟、份、俟、修に告ぐ）六字がある。

「有往必終」本集は「生必有死」（生まるれば必ず死有り）に作る。

「子夏言曰、死生有命、富貴在天」『論語』顔淵篇に「子夏曰く、商之を聞く、死生命有り、富貴天に在り」と。「言曰」二字、本集は「有言」に作る。

「四友之人、親受音旨」「四友」は、顔回、子貢、子張、子路を指す。彼らは孔子から親しく教えを受けた人たち。

「發斯談者」死生、富貴、窮達、壽夭などを談ずる者たち。

「豈非窮達不可妄求」「豈」字、「本集」は「將」に作る。

「而窮苦荼毒」「本集」は「少而窮苦」に作る。

「以家貧弊」「本集」は「每以家弊」に作る。

「與物多忤」他人と調子を合わせることができない。

「自量爲己、必貽俗患」「物と忤うこと多き」が故に、家族や一族の者に迷惑をかけることが多くなる。

「僂俛辭世」「僂俛」は、努め励むこと。無理をして世間から離れようとした。

「使汝幼而飢寒耳」「本集」は「汝」の下に「等」字あり、「耳」字無し。

「常感孺仲賢妻之言」「孺仲」は「儒仲」の誤り。後漢の逸民王霸の字。王霸が、我が子の「蓬髮歷齒、未だ禮を知らざる」を慚じているのを見た妻が、「君少くして清節を修め、榮祿を顧みず。君躬ら勤苦す。子安くんぞ耕して以て養はざるを得ん、安んぞ黄頭歷齒ならざるを得ん。奈何ぞ宿志を忘れて、兒女子に慚ずるや」と。霸は屈し起って笑ひて曰く「是れ有る哉」と。遂に共に終身隱遁す。『列女傳』第二「本集」は「常」上に「余」字あり。

「室無萊婦」「列女傳」の、楚の老萊子と其の妻の話を踏まえ

る。楚王のもとに出仕せんとする老萊子に妻が言うには「妾之を聞く、食酒肉を以てす可き者は、隨ふに鞭撻を以てすべし、授くるに官祿を以てすべき者、隨ふに鈇鉞を以てすべし。今先生、人の酒肉を食ひ、人の官祿を受く。此れ皆人の制する所なり。乱世に居り、人の制する所と爲る。能く患を免れんや」と。老萊子遂に其の妻を隨へ、江南に至りて止まる。

「良獨罔罔」「罔罔」二字、「本集」は「内愧」に作る。

「少年來好書」「本集」は「少學琴書」に作る。

「便欣然忘食」『論語』述而篇に「子曰く、女奚ぞ曰はざる、其の人と爲りや、憤りを發して食を忘れ、樂しんで以て憂ひを忘ると」とある。

「亦復飲爾有喜」「爾」字、本集は「然」に作る。

「嘗言五六月」本集は「月」下に「中」字あり。

「羲皇上人」「羲皇」は、帝王伏羲のこと。「上人」は、その頃の人の意。

「意淺識陋」「陋」字、本集は「罕」に作る。この句の下、本集には「謂斯言可保」（謂へらく斯の言保つ可し）の句あり。

「日月遂往」この句の下、「本集」は「機巧好疎」（機巧好だ疎なり）の句あり。

「恨汝輩稚小」「恨」字、「本集」には無し。

「家貧無役」「無」字、本集は「每」に作る。

「然雖不同生」「本集」は「然汝等雖曰同生」に作り、校記に「曰、一作不」とある。

「四海皆弟兄」『論語』顔淵篇に「子夏曰く、四海の内、皆な兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患へんや」とある。

「鮑叔敬仲、分財無猜」「敬」字、「本集」は「管」に作る。詳細は『史記』管鮑列伝に見える。

「歸生伍舉」春秋時代の楚の伍舉と、その友人の歸生。

「班荊道舊」「班」は、敷く。「荊」は雜草。襄公二十六年の『左氏傳』に、亡命しなければならなくなった伍舉に、鄭の郊外で歸生が会い、草を敷いて伍舉の歸國の方法について相談したことを踏まえる。

「以敗爲成」管仲についていう。管仲は齊の公子糾に仕え、鮑叔は公子小白（後の桓公）に仕え、後継者争いの結果、小白が勝ったが、鮑叔の推薦で管仲は齊の相となった。

「因喪立功」伍舉は初め亡命せざるを得なかったが、後に歸生のおかげで國に歸り、功績を挙げることになったのをいう。

「況其父之人哉」「共」字、「本集」は「同」に作る。

「潁川韓元長」後漢の韓融、字は元長。『後漢書』卷九〇に傳が有る。

「身處卿佐」「卿佐」は、執政補佐の任。

「八十而終」「八」字、「本集」は「七」に作る。本傳には「獻帝の初め、太僕に至り、年七十にして卒す」とある。

「濟北汜稚春、七世同財、家人無怨色」晉の汜毓、「稚春」は字。『晉書』卷九一に「毓に至るまで七世、其の家兒に常の父無く、衣に常の主無し」とある。

「高山仰止、景行行止」『詩經』小雅、車輦の二句。「高山を仰ぎ、大道を行く」

「汝其慎哉、吾復何言」この二句の上に、「本集」は「雖不能爾、至心尚之」（爾する能はずと雖も、至心之を尚べ）二句がある。

（命子詩）

「陶唐」堯帝。陶氏の祖先は陶唐氏であるという。漢、韋孟「諷諫詩」に「肅肅たる我が祖、國すること豕韋に自まる」と。淵明までの系譜を辿ると「陶唐―御龍―豕韋―陶叔―舎―青―同―丹―侃―茂―〇―淵明」となる。

「虞賓」「虞」は、有虞氏、舜帝。「賓」は、賓客。堯の子の丹朱は舜帝の客分として待遇された。

「歷世垂光」徳の有る人が代々出てきた。「垂」字、本集は「重」に作る。

「御龍・豕韋」いずれも唐氏一族の姓。「御龍」は、夏の劉累。

「豕韋」は、殷代の人。

「穆穆」敬むさま。温和なるさま。

「司徒」官名。教育を司る。周代、六卿の一。陶叔は周の司徒となった。

「厥族以昌」陶叔が司徒となつてから陶族は世に顯れた。

「紛紜戰國」「紛紜」は、入り亂れたさま。周が衰えてより天下は亂れて戰國となった。「紜」字、本集は「紛」に作る。

「漠漠衰周」「漠漠」は、樞み所のないさま。周の衰えた時代をいう。

「鳳隱于林」鳳凰は治世に現れ、亂世には隠れるという。『論語』子罕篇に「鳳鳥は至らず、河は圖を出さず、吾已んぬるかな」とある。

「幽人在丘」「幽人」は、隱者。内に道を藏している人。『周易』履卦に「道を履^ふんで坦然、幽人貞吉」とある。

「逸虬撓雲、奔鯨駭流」「虬」は、みずち。角のない龍。乱暴者の暴れ回ることをいう。

「天集有漢」天命が周、秦を離れて漢に就いたこと。

「眷予愍侯」陶舍は漢の高祖に従い、燕、代を伐つて功績あり、開封侯に封ぜられ、愍と諡された。『漢書』高帝功臣表。

「於赫愍侯」「諷諫詩」に「於^あ赫^{かが}ける有漢」と。

「運當攀龍」「運」は時運。「攀龍」は、龍につかまって登ること。英主に従つて功を立てることをいう。『後漢書』光武紀に「士大夫の大王に矢石の間に従ひしは、固^{もと}より龍鱗に攀ち鳳翼に附きて、以て其の所志を成さんことを望むのみ」と。

「撫劍夙邁、顯茲武功」陶舍が漢王の五年から既に從軍していること。

「參誓山河」「漢書」高惠高后文功臣表の序に、高帝が功臣に封爵する時の「丹書の信」「白馬の盟」として知られている。

「封爵の誓いに曰く、黄河をして帶の如く、泰山をして厲^との若からしむるも、國は以て永く存し、爰に苗裔に及ぼさんと。是に於て申^かぬるに丹書の信を以てし、重ぬるに白馬の誓を以てす」と。「參」字、本集は「書」に作る。

「啟土開封」「啟土」は、領地を拓げること。陶舍が開封侯に封ぜられたことをいう。『尚書』武成に「惟^これ先王、國を建て土を啓^{ひら}く」と。

「疊疊丞相」「疊疊」は、倦まず勤めるさま。『詩經』大雅、文

王に「疊疊たる文王」と。陶青は漢の景帝の二年から七年まで丞相であつた。

「允迪前蹤」「前蹤」は、先祖の歩んだ道。『尚書』皋陶謨に「允に厥の徳を迪^ふむ」とある。

「渾渾長源」流れて尽きないさま。

「蔚蔚洪柯」「蔚蔚」は、こんもりと茂っているさま。

「羣川載導、衆條載羅」前句は「渾渾長源」を承け、後句は「蔚蔚洪柯」を承ける。陶氏の分家が多くできたことを言う。

「時^し有默語」陶氏には時に応じて仕える者、仕えない者があつたことをいう。『周易』繫辭傳上に「君子の道、或いは出で或いは處り、或いは語り或いは黙す」とある。「默語」二字、本集は互倒して「語默」に作る。

「運固隆汙」時運に盛衰があつたことをいう。本集は「固」字を「因」に、「汙」字を「窟」に作る。

「在我中晉」「中晉」は、東晉のこと。

「業融長沙」その功績は長沙に輝いた。

「桓桓長沙」長沙侯は淵明の曾祖父侃^{かん}のこと。東晉に仕え長沙公に封ぜられ、桓と諡された。「桓桓」は、威風有るさま。『詩經』周頌、桓に「桓桓たる武王」とある。

「天子疇我、專征南國」天子が長沙公に南方征伐の事を相談された。『尚書』堯典の「疇咨若時登庸」(「疇^{たれ}か時に若^{したが}ふを咨^とひ登庸せん)に拠つたのであろう。「我」は、長沙公。「專征南國」は、蘇峻、祖約の反亂を討伐したことをいう。「南國」は、歷陽をいう。

「功遂辭歸」官職を辞めて郷里に歸つた。『老子』第九章に「功

遂げて身退くは、天の道なり」とある。

〔臨寵不惑〕寵命を受けたが「辭歸」の思いを変えなかった。

「惑」字、本集は「忒」に作る。心変わりしないこと。

〔孰謂斯心、而可近得〕このような心は、近頃の人には見られない。

〔肅矣我祖〕陶淵明の祖父茂のこと。武昌太守であつた。

〔慎終如始〕『老子』第六四に「終りを慎むこと始めの如くせば、事を敗る無し」とある。

〔直方二臺〕「方」は、比すること。「二臺」は、丞相陶青と長沙公陶侃のことか。

〔惠和千里〕「千里」は、千里四方。郡の治める範囲。祖父の茂が武昌太守として善政を布いたこと。

〔於皇仁考〕「皇」は偉大。「考」は、亡父の美称。名は不明。

〔淡焉虛止〕「淡焉」は、名利に淡泊なさま。「虚止」は、虚心。

〔焉・止〕は助辞。

〔寄迹夙運〕自然の中に身を託し、俗世間を避けたことをいう。

「夙」字、本集は「風」に作る。

〔冥茲愠喜〕「冥」、『本集』は「真」に作る。「茲の愠喜を真く」。

〔瞻望靡及〕父祖の如くありたいと望むも、及びもつかない。

『詩經』邶風、燕燕に「瞻望するも及ばず、泣涕は雨の如し」とある。

〔負景隻立〕後漢、崔駰「達旨」に「影を抱いて特り立ち、士と羣せず」とある。

〔三千之罪〕『孝經』五刑に「五刑の屬三千、罪は不孝より大なるは無し」とある。人間の犯す多くの罪。

〔無後其急〕「無後」は、後継ぎの無いこと。『孟子』離婁下に

「不孝に三有り、後無きを大と爲す」とある。

「卜云嘉日、占爾良時」「卜」は、龜の甲を焼き、その割れ目によつて吉凶を判断すること。

〔名爾曰儼〕『禮記』曲禮上に「儼として思ふ若し」と。注に

「儼は、矜莊の貌」とある。

〔溫恭朝夕〕『詩經』商頌、那に「溫やかに恭し朝夕に、事を執りて恪しむ有り」とある。

〔念茲在茲〕「溫恭朝夕」ということを忘れないように、ということ。『尚書』大禹謨に「茲を念ふ茲に在てす」とある。

〔尚想孔伋〕孔子の孫、名は子思、字は伋。子の字を求思としたわけを言う。

〔庶其企而〕「企」は企及の意。「而」は助辞。

〔厲夜生子〕「厲」は、癩病。『莊子』天地篇に「厲の人は、夜半に子を生めば、遽かに火を取りて之を視る。汲汲然として

唯だ其の己に似ることを恐るるなり」とある。

〔日居月諸、漸免于孩〕月日が経つに従つて、やがて成人となることだろう。「居・諸」は助辞。『詩經』邶風、日月に「日居月諸、東方より出づ。父や母や我を畜ひて卒へず」とある。

〔福不虛至、禍亦易來〕『淮南子』繆稱訓に「行ひ合して名は之に副ふ。禍福は虚しくは至らず」とある。

〔夙興夜寐、願爾斯才〕『詩經』小雅、小宛に「夙に興き夜に寐ね、爾が所生を忝かしむる無かれ」とある。

〔爾之不才、亦已焉哉〕『詩經』衛風、氓に「反むを是れ思はず、亦た已んぬる哉」とある。